

一関市立大原小学校(芦宏校長)の児童は19日、同市大東町大原の「砂鉄川たたら製鉄学習館」でたたら製鉄の実習を行った。地元  
の歴史や文化に理解を深めようとの総合的な学習で毎年実施しているもので、赤々と燃える炎に砂鉄や木炭を投入する昔ながらの方法で、鉄造りを体験した。

たたら製鉄は、粘土で築いた炉に木炭と砂鉄を交互に入れて鉄を造り出す方法で、同学習館がある内野地区でも以前は行われていたという。同日は、たたら製鉄の実践や調査・研究を続ける「ホッパの会」(小野寺秀逸会長)の協力で、同校の6年生24人が2012年に続いて取り組んだ。児童は二つの炉に分かれて、10分置きに木炭と砂鉄



炉に砂鉄を投入する大原小の児童

# 炎と格闘 製鉄体験

## 大原小 6年生

をそれぞれ炉の中に投入。2年目とあって、砂鉄と木炭を投入する人、炉に入れる分量や時間を計測する人など分担しながら、手際よ

く作業を進めた。

火入れから約6時間後、灼熱の炉の中から取り出した鉄の塊を水で冷やすと蒸気が上がり、児童から歓声

が起こった。小野寺拓己君は「みんなで協力して取り組んだので、(鉄の)塊が出てきた時にはうれしかった」と喜んでた。

たたら製鉄の実習は、旧内野小が1999年に始め、学校統合後の2010年からは大原小が引き継いでいる。小野寺会長は「実

習を通して、子供たちは地域に伝わる鉄造りの文化の一端を学んだと思う。これからも続けていきたい」と語っていた。